S. Ashina

＜前期：キリスト教と近代的知＞

オリエンテーション――「キリスト教と近代的知」

１．ティリッヒと近代的知	
２．マクグラスと自然神学構想	
３．ティリッヒとカント１	5/11
４．ティリッヒとカント２	5/18
５．マクグラス――自然神学と真理	5/25
６．ティリッヒとフィヒテ	6/1
７．ティリッヒとヘーゲル１	6/8
８．ティリッヒとヘーゲル２	6/15
９．マクグラス――自然神学と美	6/22
１０．ティリッヒとシュライアマハー１	6/29
１１．ティリッヒとシュライアマハー２	7/6
１２．ティリッヒとシェリング１	7/13
１３．ティリッヒとシェリング２	7/20
１４．マクグラス――自然神学と善	7/27

＜前回・**4/20** の確認＞

１．ティリッヒと近代的知

（１）キリスト教思想史とその課題

１．思想研究とは何か――何を、いかに論じ、解明するのか

２．思想史：伝統とその構成要素（思想的動向）

３．思想の動態の記述と類型論

波多野精一「プロティノスとカント――宗教哲学の二つの任務」（1925）

４．類型とダイナミズム（マクロな動向）

外的要因：歴史一般（個人・集団、出来事、文化）と自律的諸領域の複合性

内的要因：思想の諸要素の相互連関と目的論

５．文化システムの分化と世俗化

６．近代的知・近代思想の動態：神学と哲学の複合体としてのキリスト教思想

７．個人／共同体

神学者　　教会・教派

↓

近代的知の変動、中間共同体の規範形成力の低下

８．ペリカンと『キリスト教の伝統　教理発展の歴史』

（２）ティリッヒと近代

７．ティリッヒの近代理解

８．『キリスト教思想史講義』（A History of Christian Thought）の構想から

1）思想史という研究領域とその目的

2）キリスト教思想史の範囲

3)思想の歴史性
4)歴史における事実と解釈
5)思想史の諸動向・諸要素、思想のテロス
6)近代という知的なプロジェクト
7)近代ドイツ思想の意義
8)思想、体系と歴史

３．ティリッヒとカント１

（1）キリスト教とカント

１．近代プロテスタント神学におけるカント

ボンヘッファー（Dietrich Bonhoeffer, *Akt und Sein. Transzendentalphilosophie und Ontologie in der systematischen Theologie*, 1931）

バルトとハイデッガー、20 世紀の思想状況における教会論の再構築

この問題状況を期待するカント以降の伝統

es ist zutiefst überall das Ringen mit derselben Fragestellung, nämlich der, die Kant und der Idealismus der Theologie aufgegeben haben. Es geht um echte theologischen Begriffsbildung, um Entscheidung in der Alternative, vor die eine transzendentalphilosophische und eine ontologische Auslegung theologischer Begriffe stellt; (8)

Das Ganze will ein Versuch sein, das Anliegen des echten Transzendentalismus wie das der echten Ontologie in einem "kirchlichen Denken" zur Einheit zu bringen. (12)

A. Das Akt=Sein=Problem propädeutisch dargestellt als Problem der Erkenntnistheorie am autonomen Daseinsverständmis in der Philosophie

1. Der transzendentale Versuch　2.Der ontologische Versuch

B. Das Akt=Sein=Problem in der Auslegung von Offenbarung und die Kirche als Lösung des Problem.

1. Auslegung der Offenbarung auf Aktbegriffe　2. Auslegung der Offenbarung auf Seinsbegriffe　3. Die Kirche als Akt=Seins=Einheit

C. Das Akt=Sein=Problem in der konkreten Lehre vom Menschen "in Adam" und "in Christus"

1. Sein in Adam　2. Sein in Christus

２．カントの形而上学批判の影響

「近代以降の西欧思想における形而上学への評価を考えるとき、それを規定する思想家として、カントをあげることができる。カントの自然神学批判や独断論批判はきわめてよく知られているが、形而上学との関わりで確認すべき点は、カント哲学における形而上学への二重の評価である。それは、「人間は本性的に形而上学的である」と「形而上学的問いは人間の理論理性の能力を超えている」という二つの命題に集約することができる。

『純粋理性批判』の第一版の冒頭で、カントは次のように述べている。

「人間の理性は、或る種の認識について特殊な運命を担っている、すなわち理性が斥けることもできず、さりとてまた答えることもできないような問題に悩まされるという運命

である。斥けることができないのは、これらの問題が理性の自然的本性によって理性に課せられているからである。また答えることができないのは、かかる問題が人間理性の能力すべてを越えているからである」、「この果てしない争いを展開する競技場がすなわち形而上学と名付けられているところのものである。」(9)

カントによる伝統的な自然神学や形而上学への批判は、人間理性の能力を越えた事柄に対する間違った接近方法に向けられたものであって、ここに現代の形而上学批判の発端を見ることができる。しかし、カントに批判哲学は単なる形而上学批判にとどまらず、人間の自然的本性に属する運命的な問いにいかにアプローチするのか――「将来建設されるべき形而上学」(10)――を視野に入れた議論だったことを忘れてはならない。」(芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』24、2004年、5頁)

Die menschliche Vernunft hat das besondere Schicksal in einer Gattung ihrer Erkenttnisse: daß sie durch Fragen belästigt wird, die sie nicht abweisen kann; denn sie sind ihr durch die Natur der Vernunft selbst aufgegeben, die sie aber auch nicht beantworten kann, denn sie übersteigen alles Vermögen der menschlichen Vernunft. (A.VII) ... Der Kampfplatz dieser endlosen Streitigkeiten heißt nun Metaphysik.(A.VIII)

so den ganzen Vorriß zu einem System der Metaphysik verzeichnen (B. XXIII)

↓

カントにとって形而上学とは何か。

ハイデッガーのカント論（カント→ハイデッガー→ティリッヒ）

保呂篤彦『カント道徳哲学研究序説――自由と道徳性』晃洋書房。

北岡武司『カントと形而上学――物自体と自由をめぐって』世界思想社。

カントの三つの理念（理性そのものの自然的本性によって課せられたもの、悟性使用の全体に必然的に関係する。経験の限界を超出する。心理学、宇宙論、神学の対象。アンチノミー。統制原理。理想。）：思惟する自然＝心、世界概念一般、神。神、自由、不死（B.395）。

３．19 世紀のドイツ哲学とプロテスタント神学の起点としてのカント

神学におけるカント学派＝神学の形而上学あるいは自然神学からの離脱、

神学の倫理化。

リッチュル学派

４．カントと人間学的転回

波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想

「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」（200）「うと欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、それの理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粋理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道徳や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めていった。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるということができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」（201）

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(201)

パネンベルク

Die Anthropologisierung der metaphysischen Funktionen Gottes in Kants Kritik der reinen Vernunft, in: W. Pannnenberg, *Theologie und Philosophie. Ihre Verhältnis im Lichte ihrer gemeisamen Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, S.184-195.

（２）カントと宗教論

５．全体としてのカント、カント哲学の全体的解釈

カントの宗教論あるいは神と自由論から、カント哲学を全体として解釈するとどうなるか。

・量義治『宗教哲学としてのカント哲学』勁草書房。

「全体論は根源論に基づく。したがってカント哲学を全体論的に考察するということは、それを根源論的に考察することにほかならない。そもそもカント哲学を根源論的に考察できるのであろうか。われわれはカントの全著作のいったいどこにその根源論を見出すことができるであろうか。わたくしは遺稿「形而上学の進歩」の結尾にある「全体の概観のための付録」をカント哲学の根源論として読むのである」、「『形而上学がそのまわりを回転している二つの蝶番がある。第一は、空間と時間の観念性の教説である。・・・第二は、認識可能な超感性的なものの概念としての自由概念の実在性の教説である。しかしこの教説において形而上学は実践的・教義的である。ところで二つの蝶番は、相互に下位に置かれたすべての諸制約の総体性における無制約者についての理性概念といういわば支柱に埋め込まれている。』」(4-5)

「カント哲学は自由からの自由への哲学である、ということができるであろう。ところで、カントの自由の哲学は究極的には宗教哲学である」、「カントの信仰によれば人間が自由であるということは、人間がそのようなものとして神によって措定された、ということなのである。したがって、神こそカント哲学の真の唯一の根源である」(16)

・福谷茂『カント哲学試論』知泉書館。

「十三　カントにおける神の問題」

「カントの宗教哲学はカント研究上最も安定した、また斬新な知見の最も見い出しにくい分野なのである」、「上に見たようなやり方においては、結局、『純粋理性批判』を核心とするカント哲学は全体として、神ないし宗教を正面から論じにくい構造もっているものとして見られて」(283)、「カントの神概念は哲学的に純化された神概念であるという点でまさにその点においてはじめから非本来的な神概念であるべく宿命づけられている、という暗黙の了解」(284)、「近世哲学の核心をなすと見られる核心そのものが、つまり、認識ないし意識ないし経験が＜哲学＞という形での神とのかかわりの真正面であるのではないか、という観点がなければならない。そうであるならばカント哲学のケースでも、狭義の実践哲学と宗教哲学を超えて、その理論的中心部が＜カントにおける神＞を論じるための場所とならねばならない」(284-285)、「近世哲学もまた依然として、神との緊密な関係の

うちにあり、むしろ神への別のひとつの道を示すものとして成立しており、またそう位置付けられるべきなのである。」（285）
「では、近世哲学はどこで神とかかわり真正面から対峙しているのだろうか。われわれは近世哲学の特徴をなす＜認識＞の問題こそが、その場所であったと考える。」（286）
「『純粋理性批判』における超越論的分析論と超越論的弁証論との関係は、通常の理解ではごく単純に」「カントの形而上学批判である。しかしこの関係の意味することはこれでけにとどまるだろうか。」（286）
「上記の可能性を現実性に転ずる転回点を「超越論的理想」において形成することができるのである。・・・言い換えれば、超越論的分析論と「神」の問題との密接な連関を把握することができるのである。」（287）
「「超越論的理想」における超越と内在」
「「魂（die Seele）」の場合のように自明性と定義に訴えることでスムーズに導入されたり、「世界」のように、被制約者から制約への遡及という論理的な手続きによって＜下から＞構成された理念とは性格を異にしている。つまり、宇宙論的理念が＜下から上へ＞の構成という性格と方向を持つとするならば、「理想」は逆方向の、＜上から下へ＞の構成という性格を持つものである点が、核心なのである」、「＜超越＞性を保っている「神」の成立の所以を、カントはそのままのかたちで、あくまでも内在的な原理によって裏打ちできると考えているのである」（293）
「われわれの経験にとって「神」は不可避なのである」、「カントは認識ないし経験の基礎付けという近世哲学のもっとも核心的な場面において「神」が発祥していることを説いているのである。経験の根源は同時に「神」の根源でもある」、「「神」はわれわれの経験の超越論的基盤に根差すものであることが明らかにされた」（300）
「カントの得ていた成果は『純粋理性批判』そのものをも超え、『純粋理性批判』には盛りきれないものであったこと」（301）
↓
カントとスピノザ

６．シュヴァイツァー（1875 ～ 1965 年）のカント解釈
カント哲学を宗教論から全体的に論じるという試みにとって、シュヴァイツァーのカント解釈は、批判的な検討を要する古典的な研究である。
・Albert Schweitzer, *Die Religionsphilosophie Kant's Von Der Kritik Der Reinen Vernunft*, 1899.
カント哲学における多層的な宗教哲学構想
超越論的観念論（認識論）から宗教哲学の構築の試みとその問題性
→ 認識論の枠組みで倫理は基礎づけることができない。
1）宗教哲学的スケッチ（Die "religionsphilosophische Skizze" der Kritik der reinen Vernunft）：「プラン」とは独立して構想され、『純粋理性批判』に挿入。
『純粋理性批判』の超越論的方法論の第二章「純粋理性の基準」において提示。
理性の思弁的使用の三つの対象、理性の三つの問い、最高善と道徳神学
↓
理念の二重性：叡智界と同一視（『実践理性批判』の個体主体の道徳）／目的論

的に道徳的人類共同体と同一視（『判断力批判』『単なる理性の限界内の宗教』）
↓
a）『実践理性批判』の宗教哲学的構成
批判的観念論の地盤に立つ宗教哲学の可能性。「純粋理論理性」と「純粋実践理性」との分岐に立った構想。
b）『判断力批判』『単なる理性の限界内の宗教』の宗教哲学構想
↓
最高善の二重性
2）宗教哲学的プラン（der Plan der Religionsphilosophie des kritischen Idealismus）
『純粋理性批判』の超越論的弁証論全般に見られる宗教哲学的思想。
超越論的な三つの理念、自由の理念に優先権が与えられる（道徳法則と自由の関連づけ）ことによって、失敗する。
↓
カント哲学の全体性とはいわゆる体系か？　あるいは別の形態の全体性か？
体系とは何か、体系概念の脱・再構築

・角忍『カントと最高善』創文社。
・氷見潔『カント哲学とキリスト教』近代文藝社。

「シュヴァイツァーによれば、『判断力批判』においてカントが「創造の究極目的」としての人間について語るとき、そこでは人間は「類」として捉えられている。たんなる個人としての人間が自然の合目的性の全体を従属させるものと考えられるのではけっしてなく、類としての人間こそが、自然に文化としての意味を与え、かつその上に道徳的共同社会を形成するということによって、よく創造の究極目的たり得る、と考えられるわけである。この見地から「最高善」が捉えられるとき、その内容は、おのずと道徳的共同社会としての人類共同体の完成ということになる。ところが、これに対して、『実践理性批判』における「最高善」は、人間をもっぱら隔絶的な個人として捉える見方にもとづいている。というのも、それの内容は、道徳律に従って行為する個人がめざすところの自分自身の道徳的完成と幸福のからなっているのだからである。こうして、私たちがさきに「究極目的」の二義性として捉えた問題は。シュヴァイツァーによって、類的と個的という観点の相違に起因する「最高善」の二義性という形で提起されてくることになる」「シュヴァイツァーが積極的に評価するのは、いうまでもなく、「類的概念」の方であるから」（49-50）

「彼は、『宗教論』の論述の中から『実践理性批判』的な最高善の主観的概念につながる部分を極力排除し、逆に、創造の究極目的＝最高善の類的概念といった『判断力批判』本来の成果を継承し発展せしめているとみなされる部分を、ことさら強調し、かつ高く評価しようとすることになる。具体的にいえば、『宗教論』第三部に展開される教会的共同体論に、彼は、全カント宗教哲学の精華を見ようとするのである。」（51）

二義性：変化／発展／複合

「善への素質」「自己愛 Selbsttliebe」、「上記の二種類の動機をもとにして格率を構成する働きが「選択意志 Wilkür」とよばれる」(74)

「『実践理性批判』においては、『純粋理性批判』の考察が受け継がれているかぎりにおいて、自由とは、第一義的には、原因・結果の系列を新たに始める能力のことである」、

S. Ashina

「つまり自由は、根本的には理性の属性である」、「人間的自由は理性的・道徳的な意識の自由にほかならない」、「しかしいま『宗教論』にいたって、道徳律そのものが一つの動機として明確に性格づけられ、それと感覚的・経験的動機との対立を前提として如何に格率を構成するか、といった場面で人間的自由が考察されるようになったからこそ、人間的自由はいわば善と悪とへの別れ道である、といった認識が生じてきているのである。」（77−78）

「人間的自由は、根源的な道徳的自由を否定する可能性をも含んでいるのである」、「『実践理性批判』が人間的自由を描き出すことにおいて、まだ抽象的段階にとどまっていたのに対して、『宗教論』第一部は、人間的自由をその現実的・具体的な姿において描き出そうと苦心している」（79）

７．ピヒトのカント解釈

Georg Picht, *Kants Religionsphilosophie*, hrsg. von Constanze Eisenbart in Zusammenarbeit mit Enno Rudolph, Klett-Cotta, 1985.

量義治

「ハイデッガーは、全巻と哲学の背後で駆動している「刺針」（Stachel）」は「神あり」（》Gott ist.《）という命題である、と言い切っている。ゲオルグ・ピヒトの大著『カントの宗教哲学』はこのハイデッガーのテーゼを検証したものである。「カント哲学は全体として、またすべての個々の部分において、宗教哲学以外のなにものでもない」というのがピヒトのカント書の結論的主張なのである。」（17）

８．理性宗教と実定宗教→「自律と他律」の対立図式

カントとドイツ観念論（初期のヘーゲル）が共有する啓蒙主義的理念に基づく宗教論

理性宗教

量義治

「純粋理性の究極目的の規定根拠としての最高善の理想について」「『私の理性のあらゆる関心は（思弁的関心も実践的関心も）次の三つの問いの集約される。一、私は何を知ることができるか。二、私はなにをはすべきであるか。三、私はなにを望むことが赦されるか』」（273）、「第一の問いの答えるのは「形而上学」である、第二の問いに答えるのは「道徳」であり、そして第三の問いの答えるのは「宗教」である」（274）、「形而上学、道徳、宗教の全体をけっきょく人間学と見なすことができる」「神学との関わりをもつ人間学」「神学は人間学のための神学」、「形而上学は道徳を準備し、そして道徳は宗教へと発展してゆくのである」「信仰とは道徳的信仰」（275）

「徳と・・・幸福との一致」「『実践理性批判』では、この最高善の可能性の必然的制約として、魂の不死とともに、神の現存在が要請されている」（276）、「神が最高善の必然的制約であるというのは、まだ人間と神との間の人格的関係ではない」、「宗教は純粋理性に基づく道徳法則を神の命令として受け取るところに成り立つのである。そもそも、われわれが、道徳法則がその促進を命じる最高善の可能性の根拠として、神の現存在を要請しうるのは、じつは道徳法則そのものが神の命令だからである」（277）

「神の子とは道徳的完全性、すなわち聖性の体現者である。聖性とは道徳法則への意志の

完全な適合である」(278)、「神の子に対する実践的信仰」、「大事なことは、われわれの自身がみずから神の子にならって生きはじめることである」、「人類としての「共同体的善」」「共同体的善を促進するために、全人類的な倫理的共同体が建設されねければならない」(279)

「『「真の唯一の宗教は法則以外の、つまりわれわれがその無制約的必然性を意識することができ、したがってわれわれが純粋理性を通じて（経験的にではなく）啓示されたものとして承認するところの実践理性的原理以外の、なにものも含んでいない」』」「「真の唯一の宗教」とは道徳的宗教である」、「歴史的制度的教会としてのキリスト教は真の宗教ではない」(280)

「聖書の宗教とはイエスの宗教」(282)、「カントの聖書からの引用は圧倒的に山上の垂訓からである」(283)、「山上の垂訓はメシアとしてのイエスの教えなのである」(284)、「イエス・キリストの信仰の中心は贖罪の信仰である。贖罪の信仰は代罰代贖の信仰である。しかしカントの理性信仰はこれを拒絶する。根本悪という罪責は他人が代わって贖うことのできるものではない、と言うのである」、「カントの立場は神人共働説であり、歴史的に言えば、半ペラギウス的立場である」(285)、「聖書のキリスト教はカントの言う理性宗教ではない」(286)、「契約に由来しない法の立場は律法主義である。カントの道徳的宗教は律法主義的である、と言わねばならない」(287)、「道徳的信仰は道徳であって信仰ではない、と言わなければならない。」(288)

９．理性宗教の立場からの他律的な実定批判　→フォイエルバッハ・マルクスの宗教批判

カントと初期ヘーゲルのユダヤ教批判

（ヘーゲルはカントを乗り越えて行くが、ユダヤ教批判は残る）

イエスの宗教・理性宗教を妨げ、それを挫折させた実定的宗教

↓

カント哲学が『純粋理性批判』を超える宗教哲学の可能性をもっていたとすれば、カント自体に、対立図式を超える可能性を探ることができるはずである。

↓

（３）ティリッヒのカント論　→　「ティリッヒとカント２」(5/18)